土を考える会を

若手農家の参加で活性化

全国6地区で500余名が参加

関東甲信越土を考える会の渡邉会長に聞く

「土を考える会」は、農業に対する圃場づくりや基本技術、機械化をテーマとして先進的農家が情報交換を行い、手弁当で研鑽を重ねる革新的な農業経営者組織だ。1978年の「北海道土を考える会」の創立から45年、本州で各地区に設立された有機物循環農法研究会など様々な変遷を経て、現在全国6地区約500余名の会員が活動を行っている。現状を見ると第2・第3世代の時代となり、研修会も興味深い内容が多いことから若手農家の入会や参加が増えてきた。弊紙では全国6地区の土を考える会会長に、ご自身の農業経営や各地区での土を考える会の現状と今後について話を伺っていく（不定期）。

関東甲信越土を考える会　渡邉会長

今回、その第2弾として「関東甲信越土を考える会」の渡邉宏幸会長に話を伺った。渡邉会長(53)は栃木県鹿沼市にある㈱農業生産法人ワタナベの代表取締役を務める農業経営者だ。経営面積は90㌶。地目は水田がメインで畑地も点在する。内訳は水稲50㌶でうち25㌶がWCS。そして小麦が30㌶弱。それにサイレージ向デントコーンが10㌶の構成。基盤整備の標準は30㌃。9割以上が借地を占める中で可能な限り合筆し効率化を図っている。少しずつ拡大を続ける農地は隣接地ばかりでなく、一番の遠隔地は20キロメートル。

従業員は3人で役員が2人。オペレーターは常に不足しているそうだ。

水稲は少肥多収で高温耐性を有するとちぎの星を栽培。ほぼ業務用で一部ECサイトでも販売。甘くて粘り気が少なく大粒で食感が良く、おにぎりに最適とのこと。大賞祭にも献上されるコメとあって、最近始めたアマゾンでの販売も好評とのこと。コメの生産量が減少する中で、「コメの値段は下がっておらずこれからチャンスになると思う」と話す。

【機械の保有状況】

ニューホランド(NH)トラクタが145馬力を中心に4台。クボタの90馬力が1台。

65馬力が3台。コンバインはクボタ・ヤンマーの6条刈自脱と汎用が2台ずつ。WCS用ベーラーがヤンマーとタカキタ1台ずつ。

防除はDJIの農業ドローンT20を使用する他、除草剤は自作のラジコンボートで散布。自身でメンテナンスできることから中古機も多用。

追肥はキセキの愛さいかの後ろで尿素を動散で振りながら散布。作業機はロータリーが4～5台。その他、自動操舵はNHの3台をトラクタに、FJD製1台を田植機に装着。また、今年からCHC製のテストも予定している。

そうした中でスガノ製品は、リバーシブルプラウがパワフルリンクプラウの4連と5連を1台ずつと、ショートフレームの4連軽を1台。

またスタブルカルチ8本爪と4メートルのレーザーレベラーを1台保有し、バーチカルハローも所有。

ほ場の土質は砂状で作土層は20センチメートル程度。水田はスタブルカルチを掛けて排水性を良くしてからのロータリー耕が良いそうで、もちろん代かきも攪拌耕の後にかけている。

米麦やWCSの収穫機を複数台ずつ所有。スマート農機の導入も積極的

長年、全層プラウを掛けてきたことで土質も良い方向に変化してきたそうだ。これこそ『積年良土』だねと笑顔で話す。特に差が出るのが長雨や異常高温等の天候不順の時。悪天候時に適期作業を滞りなく行える上に、例年通りに作物の出来も良い。

そうした中でスガノ製品に思うことを聞くと「プラウの形状ひとつひとつ見ても、ものすごく計算して作っているのが分かります。どんな時でも私たちの声をしっかり聞いて機械に取り入れてもらえるのはうれしいですね。確かに単価は高いけど経営の中で回すことができればしっかり元の取れる道具になる、使いこなすことで全体の底上げができる。その努力工夫をしていくのが経営の醍醐味ですね」と強調した。

スガノ製品はパワフルリンクプラウなど積極的に活用。全層プラウを掛け続けたら土質が改善したそうだ

一方、施肥については化成肥料と堆肥を併用。

ここ数年、鹿沼市で育成牛を育てている畜舎に稲わらや麦わらを供給して、その代わりに堆肥の供給を受けるという耕畜連携を行っている。堆肥の継続使用で、今まで以上に生育が安定してきている実感はあるが、散布に時間がかかるので、ブロードキャスターなどで散布できるようなペレット化も検討するそうだ。

また地域の課題として、米麦と畜産は歩み寄っているが、野菜作と畜産には距離があるそうで、それを上手に繋げて地域全体で堆肥の有効利用を促進したいと話した。

自作したラジコンボートは、ホームセンターで買える手ごろな部品調達など製作方法を伝授し仲間内での広まりを見せる。

渡邉会長は機械好きで整備は全て自社で行う。またトライ&エラーを行いながら効率的な体系構築に向けたチャレンジを常に続けている。「機械好きは仕事に直結するし、機械がわからなければ仕事にならない。弟がメインで整備しているけど、どちらかがいれば緊急でも即対応できる。トラクタは機械式のGMが最高だね。今のトラクタは電子制御で止まってしまうのが難点かな」と話す。新技術も積極的に導入している中で気になる製品を聞くと北海道で普及している管理用のロークロップタイヤを使いたいと話す。

スガノ製品では浅耕リバーシブルプラウや、発売前だが開発中のランドハロー（未販）が面白いねと話す。

〈スガノ農機との出会い〉

スガノ製品の導入は、周辺で作業して面白そうと共同購入したプラソイラーDX5本爪に端を発する。仕事が早くて良かったと当時を回顧。

本格的な出会いは、麦作の面積を増やそうとしていた2001年頃、1作で雑草が繁茂したことから、播種前に圃場をきれいにしたくて2連の14インチワンウェイプラウRQY142を導入。「80歳を越えた父は『石を出すようなことはするな』とプラウを毛嫌いしていた」そうだ。作業をしてみると雑草も減り収量も増えたことから、もっと勉強したいという思いが沸きあがっていた。

プラウで土を反転して圃場の状態を良くし、後処理まで考えた圃場づくりに向けたバーチカルハローを導入。そして、圃場の凹凸が増えたのでレーザーレベラーを導入。

3点セットが揃ったことで、より良いほ場づくりへとさらに発展していった。

そうした中で2010年のスガノ農機主催のイベントに招かれたことで、スガノ農機との距離がぐっと近づき土を考える会への入会を決めたそうだ。

関東甲信越土を考える会

何かのきっかけの第一歩に

『変態』が集うから刺激を得る良い機会

現在、101名の会員を擁し、拡大を続ける「関東甲信越土を考える会」。栃木・茨城・千葉の会員が多く、水田ベースで転作作物の生産が多い。現在は30～40代が増えているそうで、その世代を中心にまとまりを見せている。

「30代半ばから40代前半は色々チャレンジしても怖くない時期なので、土を考える会は良い場だと思います」と渡邉会長。

先日開催の役員会でも、何かのきっかけの第一歩になる機会づくりをしたいと話す。

そうした中でコロナ禍が明けて徐々に活動は本格化。昨秋に秋の交流会、2月には『土壌のつくり方と活かし方』をテーマとした冬の研修会を開催している。

「今年の2月が本当の意味での新たなスタート。微生物や有機物を活用して、土をどうするか。様々な議論は、自分自身にとっても原点を見つめ直す良い機会になりました。また、プラウについて議論や情報共有したくても、近隣に同じような考えの方がいないと『寂しい』思いをされている方には是非仲間に加わって欲しいですね。『変態』が集う場ですから刺激を得る良い機会になると思います。土を考える会は、全国6地区で、地域ごとの課題をテーマに中規模で集まる感じが良いと思っています」と話す。

その他にも県単位での実演会や勉強会も実施するなど積極的な活動を見せているようだ。

実質的に再スタートを切った2月の研修会では積極的な議論がなされた

〈入会のきっかけ〉

2010年のスガノ農機主催のイベントで入会を決意した渡邉会長。

早速、土を考える会に参加し懇親会翌日早朝のプラウの座学で『なぜ有機物循環がいいのか？だからプラウなのですよ！』と講師が強調したのを聞いて、はっと目を覚ましてプラウを使って間違いなかったと納得し確信が得られたと笑顔。その後の積極的な活動を通して土づくりの学びを掘り下げていった。

とはいえ入会から14年ではまだまだと話す。

それは心の師である勝部さん（故勝部征矢氏、北海道栗山町の農業経営者。東洋一の小麦王）のDVDを擦り切れるほど見返し『半年しかないからやるんだよ！』ザ・北海道人イズムの開拓者魂に憧憬を抱いているからだ。

先駆者として北海道の経営者が大地と自然を相手に奮闘しながら土の力を引き出す姿に感銘を受け続け、それを吸収すべく研修会にも随時顔を出し交流を広げた。

北海道のみならず全国各地に交流が広がる中で、中々地元では聞けない作目や規模、各種条件の違う先進的な農業経営者の本音の声を交流の中で聞くことで、新たなヒントの得られる貴重な場として機能していることを肌身に感じていると渡邉会長。いま渇望するのは全国との横の連携強化だ。

ある時、北陸東海近畿土を考える会の高木会長と呑み、違う場でも東北土を考える会の清水会長と同室で宿泊して話す中で、地域を越えた情報交換できる場づくりをしたいと改めて思ったそうだ。

今後、各地域の会長と協調しながら忘年会や新年会だけではない事業化に向けた動きをできればいいなと大きな期待を述べた。

◇　◇　◇

関東甲信越土を考える会については問い合わせは、事務局のスガノ農機㈱関東甲信越支店まで。▽茨城県稲敷郡美浦村間野天神台300　☎029（886）0033